差別を超え、不安をなくしていくのは、『事実の力』

繁野玖美・作業療法士

地域で作業療法士として働く私にとって、知的障害は近くて遠い存在でした。というのは、私のかっての職場では、知的障害のある人達が清掃業務を行っており、常にその姿を見ていました。しかし、作業療法士としてかかわったことはほとんどありませんでした。今日の講義を聴いて、知的障害のある人のことが少しわかりました。その人に合う方法を使えば、いろいろなことができることも知りました。その姿を多くの人に見てほしい、私もそうした工夫を一緒に考える作業療法士でありたい、と思いました。

日本では、特に知的障害のある人や精神障害のある人、認知症のある人を「何もできない人」「保護しなければならない人」と見てしまう傾向があります。人に迷惑をかけ、周りの人だけが苦労しているという誤解もあります。

これが、やまゆり園事件や数々の障害者施設での虐待事件につながっていると考えられます。一体、その根底にあるものは何なのでしょうか？偏見や不安をつくりだすものは、私たちの中にあるのかもしれません。「人に迷惑をかけてはいけない」という道徳心や無知が時には差別を生み、自分を守るために他者を貶める場合もあるでしょう。

講義の中で、「手をつなぐ育成会」の初代会長の映像が出てきました。知的障害にあっては、障害者運動の牽引役は家族だったと思います。家族の働きかけによって行政は大きな入所施設をつくり、そして今、当事者の希望や施設入所の弊害が明らかになる中で、行政は入所施設から地域生活へと移行を進めています。

しかし、施設をなくすことに反対するのは、家族でもあるという記事を読んだことがあります。その記事では、「地域生活に不安を感じる家族」と「すでに地域生活を経験している家族や当事者」との交流を増やし、家族の不安を軽減させる支援が必要だと書かれていました。

ピープルファーストジャパンやパンジーメディアでの実践を知り、差別を超え不安をなくしていくのは、『事実の力』、知的障害の人たちが生き生きと胸を張って生活している姿を示すことだと思いました。そして、どういう工夫があれば、障害のある人が主体的に希望を実現していけるのかを発信していくことだと感じました。

私も自分の仕事を通して、その一翼を担いたいと強く思いました。